

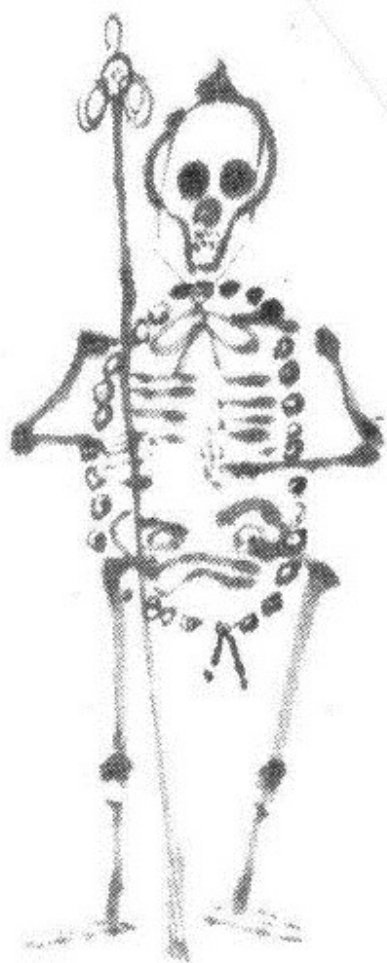
じょういりづか 定入塚

いま ねんくらいまえ じょうけんほういん へら うばそく しゅつけ さんりん ぶつどう しゅぎよう だんし ぎようじや やまぶし
今から三五〇年位前に、浄願法印という、偉い優婆塞（出家しないで、山林などで仏道を修行する男子で、行者とも山伏とも呼んでいる）がいました。

うばそく やまと いま ならけん かつらぎやま やま なんぎようくぎよう うえ ほう おさ りつぽ うばそく かくち
この優婆塞は、大和（今の奈良県）の葛城山や他の山で難行苦行の上、法を修めて立派な優婆塞になりました。それから各地を
じゆんしやく ぼう かくち お と まんじ ねん しょうがつ か くもおかあげお き くもおかやま みなみ
巡錫（お坊さんが各地をめぐり、教を説くこと）して、万治三年（二六六〇）正月七日に、雲岡上尾に来ました。雲岡山の南
の岡です。

うばそく おか じぶん は はか あな ほ た はいり みぎ て しやくじよう どうし どうきよう おし ひと
ところが、優婆塞はこの岡に自分で入る墓の穴を掘って、立って入り、右の手のひらに錫杖（道士へ道教の教を説く人）
そう もち つえ も じよう むかし そう ぎようじや
や僧が用いる杖）を持って、定（昔の僧や行者などが
い はか はい いきほとけ は
生きながら墓に入り生仏になること）に入りました。す
にゆうじよう
なわち入定しました。

いま うばそく からた くさ
今もなお、その優婆塞の体は、腐らずにミイラとなつ



て、そのままあると言われています。そこが定入塚です。

この塚には元治元年（一八六五）正月五日に、東予（今の愛媛県の東）の牧野宗胤という人が書いた説明の碑が立っています。

（『豊浜のむかし話』より）